

〈調査報告〉

中国の博物館・美術館訪問記(上)

杉本 憲司

ここ数年の間に、訪問・見学した大小の博物館などは、はるか50館を越えている。また数だけでなく、ここ10年ぐらいの間での博物館そのものの建築や、展示室の新しいものへの変化、また新しい展示方法には目をみはるものがある。これらは中国経済のめざましい成長と、文化の新展開によるもので、身をもってそれらを感じてしまう。これからいくつかの博物館について、見学した感想を述べてみたい。外国での研究踏査、遺跡・文化財見学であるので、時間的に十分な余裕なく、また中国で私は外国人であることによって、日本国内での見学記とはことになってくる。

北京市内には、数多くの博物館などがあるが、ここでは2、3の中心なものに限定して述べてみる。一つは中国の中心的な「中国国家博物館」である。北京市内の中心、故宮の南門である天安門の前にある天安門広場に、西側の「人民大会堂」の真向いの広場の東側に「中国国家博物館」がある。かつては、ここに「中国歴史博物館」と「中国近代史博物館」の二館が並んであったところを全面改装して、一つの大規模な博物館になった。場所は北京中心であるが、館までは最寄りの地下鉄駅から歩いていくのが良い。車でいくと止めるところが近くになく大変なことになる。

博物館にはいるのには、入場券を購入して(最近は入場無料のところがある)入口で荷物検査をうける(これは中国すべての博物館・美術館で同じである)。中にはいくつかの展示室に分れているが、私は通史の部屋をみた。ゆっくり見るとほぼ一日かかる位。旧石器時代から近世までの、歴史の教科書に必ずあるものは言うまでもなく、物で通史を語ってくれる。写真が撮影できるので、特に時間がかかるのであるが、中国人の見学者も説明員の解説を熱心に聞いていて、これも時間がかかりそうである。

この通史の部屋以外に、近現代史・革命関係の部屋、特展の部屋とゆっくり見ていくと、数日かかりそうである。時間と足と興味・関心力を持って行くべき博物館である。今回の私の見学は旅行者としての時間の制約の中であったので、気分はすっきりしないものに終わった。

長安街を西に行った月壇には、「首都博物館」がある。これは首都北京市の博物館で、非常に近代的建築物で、北京市の歴史を旧石器時代から現代にいたるまでを遺物、美術品とテーマごとのジオラマによる展示は、中国の最近の博物館すべてと云ってもよいぐらいに行われているものであるが、非常に見学者に理解されやすいもので、これを展示している学芸員の努力がうかがえる。特に北京は元時代以来の都であるので、都としての北京を復元したジオラマはすぐれている。ここは、私がいった時は見学者が少なかったので、ゆっくり見ることができた。

北京市内で、私が見学したもう一つは、市内中心の王府井大街にある「中国社会科学院考古研究所」内にある陳列室である。ここは一般に公開されたものではないので、関係者の紹介が必要であるが、中国アカデミーの研究所であるので、国家規模で行われた考古調査の成果がすべて展示されていて、考古学の書物に掲載されている遺物が、目の前でみられるので、考古学を勉強している私にとっては興奮の連続で見学したことを今でも記憶している。

北の方から中国各省の博物館を紹介していく。

遼寧省と一部吉林省と内蒙古東部について紹介しておこう。遼寧省の省都、瀋陽市はかつての「清」朝のもとになった「後金」の都であり、「盛京」と称し、後、「清」朝が北京に遷都してからは副都とされ、「奉天府」が設置されるような歴史都市で、副都として「瀋陽故宮」が今日にのこる。「満州国」時代には市内中央部は日本が支配していた歴史がある。

ここには「遼寧省博物館」があり、省内の重要な文物が集められ展示されている。ここで注目されるのは、日本・朝鮮半島の青銅器文化に関係あるものが多くみられる。

「瀋陽故宮」は「北京故宮」と比較にならないが、ごくこじんまりとした「清」朝発祥の地にのこされた故宮建築が復元されていて、歴史を感じるものである。これから吉林省南西部にある高句麗時代の遺跡群にある遺跡と博物館、資料館を紹介しておこう。

集安市では「集安市博物館」を訪問したが、改装中で休館になっていたが、吉林省考古研究所所長金旭東氏のはからいで見学させていただいた。また、集安市には有名な「広開土王(好太王)碑文」が残っている。今は碑のところに、保護するような形の建造物で囲まれた形になっている。この附近には丸都山城(山城古山城)、国内城と高句麗の古墳群(将軍塚、大王陵、洞溝古墳群〔壁画あり〕、千秋墓など)があり、博物館ではないが、生きた遺跡博物館である。

遼寧省内で有名な博物館としては、大連市旅順にある「旅順博物館」がある。これは1917年に、日本が大連を統治していた時に建てられたものにはじまるもので、大谷探検隊が持ち帰った西域などの文化財の一部が、ここに収蔵されて今日にいたっている。その外、すぐれた収蔵品が多くあり、別館には日本統治時代にここ大連にあった日本画、日本陶磁器などがあって、これは注目される。

遼寧省内の西部から内蒙古東部にかけて遺跡訪問をした時にも、多くの博物館を見学することができた。

査海遺跡は約7600年前の新石器時代のもので、ここでは石積みの方の形をしたものがみられて注目された。今日はすでに埋めもどされていて、地上に再現されたものがみられる。ここの横に「査海遺址博物館」があり、レプリカであるが、出土した玉の竜形のものなどがおかれている。

バスで通過した義県には、北魏時代に建てられた「万佛堂石窟」がある。中国北方でみられる北魏時代の代表石窟であるが、すぐ側を流れる凌河の洪水で、大部いたんでいる。

朝陽市にはいると、大きな北塔があり、もと北魏時代には木塔としてつくられたが、後代に修復がくりかえされて、今のような磚造の塔になっているが、この修復時に発見された、仏舎利、金・銀器、玉器、宝飾品、仏

典などが展示する「北塔博物館」が修復された塔内につくられている。まさしく遺構につくられた博物館としてよくできている。市内には「南塔」も修復されてのこされている。

牛河梁遺跡は、中国北方地域における新石器時代の墓地、宗教的遺構がある山梁上数ヵ所にみられる遺構によって構成される大遺跡で、出土する遺物が赤峰紅山文化に属する各種の形式をもつ玉器類、人物塑造、なかでも婦人像は大変有名な遺物である。ここには工作站がある位で、若干の遺物しかみることができない。

内蒙古にはいり、赤峰市による。ここは、戦前に京都大学の水野清一先生らが調査した赤峰紅山後遺跡があり、これが中国北方の新石器時代文化の中心となる紅山文化で、世に知られるきっかけになった。紅山というのは紅い色の岩が多い山から名付けられたが、この山の後面で最初の調査が行われ、その後も調査は継続されている。表面採集でも土器片は見つけられる。ここ赤峰には、「赤峰市博物館」がある。ここには遺跡が多くあり、且つ遺物が多いので博物館の展示品も紅山文化像を知るのに大変良い博物館である。

また、ここで、地元の関係者のはからいで三座店夏家店下層文化石城遺跡に案内してもらった。この遺跡は水利工事によって発見されたもので、私が先年、内蒙古自治区の首都であるフフホト(呼和浩特市)にある、内蒙古自治区考古研究所の所長室で見た航空写真に、この遺跡のものがあり、一度見学したいものと思っていたところであった。この遺跡は、高地性で、まわりより少し高い丘陵上に、石を積みあげた方形の石城壁があり、馬面風の突起上のものがみられ、また小城が併置されている。この中に石積みの壁を持つ竪穴住居がある。この外、井戸、倉庫、道路の跡も見られる。この様な遺跡は、この地域で東西にある尾根の南側につくられている。博物館ではないが、生きた遺跡は博物館の展示品と違って、生のすばらしさを目にすることができる。

「巴林左旗遼上京博物館」は、赤峰市から北に約3時間高速道路で北上したところにある。この地はかつて100年前に考古学者の鳥居龍蔵氏が夫婦で滞在して調査した場所である。ここは、今の町のすぐ外側に遼の上京の

都城遺跡が存在しているので出土文物が多く、これが展示されている。都城遺跡の外、西方のセンチョク山麓には、遼の太祖陵があり、それに関するドルメシ型石室がみられる。

遼は契丹族の国で、凌河、シラムレン川流域に耶律阿保機(872～926年)が建国した国で、第二代太宗が南にあった漢族の国「宋」に勝利をおさめ、農耕民と遊牧民を支配する二面支配体制を行った。遼は復都制をとり、上京の外、東京、中京、南京(現北京)、大同に都がおかれた。

この中京は、今の寧城市にあたり、ここに「遼中京博物館」がある。寧城大明塔の横にあり、ここには付近出土のものが多く、特に東北地区の青銅器の遺物が展示されていて、半島、日本との関係を知るためには重要である。遼寧錦州には「錦州市博物館」があり、そばにある広済寺小建築群(遼代創建、清朝再建)と一体化している。このあたりも東北地区青銅器の遺物の多いところであるので、半島、日本の関係のものを研究するのに、一つ重要な博物館といえる。

河北省は北京市に隣接する省で、世界遺産の万里の長城・清朝関係の文化遺産(承徳の避暑山荘・清朝の帝陵)がある。殷・周時代から中原の北にあって、東北地方の勢力との接壤地にあたる重要な地区である。西周時代の燕国にはじまり春秋・戦国時代には燕、趙、中山の各国があり、遺跡としては易県の燕下都、中山王陵、趙の都「邯鄲」などがある。秦漢時代の遺跡は数多くみられる。三国・南北朝時代には三国時代の魏関係の遺跡が多くみられる。この中で、今回は北の方から注目すべき博物館を紹介していく。

保定市満城県には、前漢時代の中山靖王劉勝とその夫人竇綰の墓がある。県南西の陵山上に、石灰岩の岩壁をくり抜いてつくられた大型の洞室墓がある。1968年に調査され注目された。1号墓(劉勝墓、武帝の兄)は、墓道角道、南北耳室、中室、後室からなり、全長51.7メートルある。南耳室は馬車庫、北耳室は食・飲料庫であり、中室は墓内棺前にあって祭儀を行う場所で、塗金帷帳がありそこに祭具がならべられていた。後室は棺室にあたり、板石石室があり、この北端に棺床がつた。

墓室内に多くの副葬明器がおかれていたが、今日は遺物はすべて「河北省博物館」にあり、現場の墓室内には複製された明器類が置かれていて、生きた博物館となっている。ここからは金縷玉衣をはじめ青銅器、鉄器、金銀器、土器、玉器、漆器、染織品などが出土していて、青銅器だけで1号墓には419点、2号墓には188点もあった。今はすべて「河北省博物館」に蔵せられている。

2013年7月に改修された省都石家荘市にある「河北省博物館」は、7月現在ですべて再開されていなく、満城漢墓出土品はまだ陳列されていない。河北省は陶磁器の製作地が多く、定窯、磁州窯、唐山窯などが有名であるので、陶磁器展示の部屋は見ごたえがある。又、魏晉南北朝時代にはひとつの舞台として多くの人々が活躍したところで、北朝関係の墓室壁画の展示は、実物をはがしてきた部分と模写の部分を併せて、墓道、墓室を復元した部屋は、唐代墓室壁画の先駒をなすもので、歴史的にもすぐれた展示部屋である。

河南省との省境にある邯鄲市の南部にある臨漳県には、古都「鄴」がある。春秋時代にの斉の桓公によってつくられ、晋にうばわれ、戦国時代には魏になり、西門豹が漳水から水をひいて灌漑したことで有名である。後漢末には袁紹がここによって独立の勢いをしめたが、曹操が袁紹を倒して、この地に都をおいて魏を建国することになる。その後も後趙、前燕、東魏、北齊の都となった。

曹操の後継者である曹丕のときに、献帝となり、洛陽に都をうつすまで、ごくわずかの間だけ曹操の都として有名である。現在ここで、中国社会科学院考古研究所が調査を行なっていて多くの成果をあげ、「鄴城遺跡博物館」を開館している。最近鄴城の東部の川の沙中にあった坑内から3000件に近い石仏像が発見され、現在、博物館で整理しながら、一部を展示している。現地隊長である、中国社会科学院考古研究所の朱岩石氏が、私の友人であったので、北京から来て説明をしてくれた。また博物館の中庭には「鄴」都全体の大型の復原模型があり、二階の廊下より下を眺めて全体の姿を知ることができる。

城の東北部にある「銅雀台」「金鳳台」「冰井台」の三台は現在も残ってい

て、遺跡博物館のように見学することができる。

鄭から漳河をこえて南下すると、河南省にはいる。ここは安陽市で、世界文化遺産として有名な「殷墟」遺跡が存在するところである。殷墟は1899年の甲骨文字が刻された亀甲獣骨の発見以来、本格的に1928年より考古調査が行なわれ、今日に至る。現在では洹水の北側で、殷墟より少し古い洹北商城が発見・調査されている。洹水南部の殷墟小屯地区からは宗廟宮殿址などの大型建築址や殷墟5号墳(婦好墓)などが発見されている。また洹水の北側の武官村一帯からは、王の墓といわれている大型墓13基を含む王墓群も発見・調査が行なわれている。

この小屯地区にあるのが「殷墟博物館」で、ここには長年、殷墟を調査して来た中国社会科学院考古研究所の発掘・研究成果が展示されている。陶磁器(原始磁器を含む)、青銅器(容器、武器類)、玉器、甲骨文字など約500点余りの一等文物(国宝、重要文化財)が展示されている。

また、宮殿宗廟の復元建築もあり、遺跡博物館としても立派なものである。また、洹北の大司空村の大型墓地群にも、地上に墓坑の形を植栽で示す外、墓坑を復元して展示をしている。

安陽市内に2009年に国务院のきもいりで建設された国家級の博物館として「中国文字博物館」が建設された。中国文字の最古で、今日の文字の祖になる「甲骨文字」発見地にできた博物館であるので、中国文字の歴史を多くの実物を展示して、解説をしている。漢字だけでなく、文字に興味を持っている人にとっては、大変素晴らしい博物館といえる。

安陽市北部には、最近世界的に話題になっている「曹操墓展示室」がある。安陽市安陽県豊郷西高穴村で、後漢時代末の墓(西高穴2号墳)が発見され、調査されたところ、出土品の中に「魏武王」の文字が刻されたものがあつたり、出土人骨が60歳くらいと鑑定されることなどから、この墓を曹操墓とする考えと、それに疑問を持つ説があり、論争が行なわれている。地元は観光資源として曹操墓説で地元「曹操墓展示室」をつくっている。先日、訪問した時、政治的な問題(皇帝クラスの墓の発掘調査が禁止されていることにふれている)で、現地の人々、展示室の人々は少し緊張気味で、

写真をとることは全く禁止されていた。墓そのものの見学もできなくなっていた。

河南省の省都鄭州市郊外の発展には、目をみはるものを感じながら市内にはいり、「河南博物院」を見学に行く。新しき大型の省博物館のはしりであるこの館の観客者の多さに驚く。大小・男女ともに多く、日本でもこれくらいの観客者があればとうらやましく思う。展示品は中国文化の中心地であるので、鄭州・洛陽・安陽の各市は殷代前期の二里頭文化・二里崗文化・殷文化の遺跡地区でもあるので、出土文物には立派なものが数多くある。また、漢代には洛陽が都であったことから、漢代墓出土の明器にもすぐれたものがあり、特に家型明器に大型住居のものがあり注目される。展示室も青銅器・玉器などをまとまった形で展示しているので、文物を理解するには便利になっている。また団体であれば、解説員に説明してもらうこともできる。

鄭州市には鄭州商城の城跡址があり、発掘されたものの一部が遺跡展示室でみられる。

鄭州市の西方、洛陽市のすぐ東には二大遺跡がある。ひとつは西にある夏代の最後の都とされる二里頭遺跡がある。現在、発掘調査がされているが、見学の時期によっては、発掘中の遺跡をみることができないが、遺跡の中心に近いところに、中国社会科学院考古研究所の発掘隊事務所には展示室がある。発掘隊長の許宏研究員は昔からの友人であるので、何時も見学には特に配慮をうけている。展示室には二里頭遺跡出土の土器を年代別に棚をもうけて陳列してあって、その形式の変遷を知ることができる。他の遺物も同じ棚にそろえてある。また、発掘された遺跡の図面も壁面にはっているので、多いに参考になる。

二里頭遺跡の東方数キロのところには、殷初期の夏と並立して頃の大拠点である「偃師商城遺跡」がある。ここには、「偃師商城遺跡博物館」があり、遺跡出土の遺物が用途、時代ごとに展示してある。遺跡地の博物館であるので、展示には少し問題があるが、出土遺物の重要なもの、図面などの展示があり、偃師商城の重要性がわかる。遺跡は広いが、今は調査がほとんど終了しているので、地上にのこる西城壁の城門址がみられる。

次に長江流域の各省にある博物館をみていこう。最近の四川省は、再度の大地震、大雨という自然災害をうけているが、最近、ほとんどが新しい博物館に変わっていて、且って私達が四川省文物考古研究所と奈良県シルク－学研究センターとの共同調査をした時とは全くちがった印象をうける。

成都市から西南方向に3時間位にある雅安地区は、南方シルク・ロード、西南中国との茶馬道コースにあたる地区で、古代より重要とされ、漢代には墓前に石闕などをもつすぐれた墓が多くみられるところである。且つ今はパンダ生育保護地区になっていて、パンダ公園もあって有名である。「雅安市博物館」は震災前は公民館の様であったが、今のものは大型の博物館で、周辺にあった石造品がホールで集められて展示されている。その他の文物の展示も、以前とちがって多くある。また茶馬古道についての展示もすぐれたもので、省研究所と日本の九州大学が共同調査をしていて、今後の発展が期待される。

成都市内には、新しくなった「四川博物院」がある。四川省内には石器時代からのすぐれた文物が多くあり、特に青銅器時代には中原と少しことなる三星堆・金沙文化があり、この文化の展示があって充実したものである。また漢代の石造文物、蜀文化のすぐれたものなどが展示されていて、楽しい博物館になっている。

遺跡地につくられた博物館としては、成都市郊外の広漢市にある「三星堆博物館」がある。前2000年頃の三星堆文化に属する城址遺跡があり、その中にあった祭祀坑といわれ坑内から、大型の青銅製の人物像、貼金銅人頭像、青銅縦目仮面、青銅戴冠縦目仮面、青銅神樹、青銅立人像、青銅大鳥頭、儀仗を持つ祭司像などの出土品は、中原では見らない蜀地方の青銅器で、この博物館に展示されている。その外、注目されるのは、この遺跡の中心の青銅器文化の背景をなす、土器、石器、玉器の展示にも力を入れたものがあり、研究上ではすぐれた博物館と云える。

三星堆文化より時代が少し後になる金沙文化(中原の殷末・周初時代にあたる)の大遺跡が成都市内西北部にある。確認されただけで5平方万キロの大遺跡で、現在は遺跡博物館として、遺跡の中心部分に大ドームの遺跡博物館と別に展示室を持つ「金沙遺址博物館」がある。ここからは「太陽

神鳥金箔」(外径12.5cm、内径5.29cm、厚さ0.02mm)をはじめ金器200余点、青銅器1200余点、玉器2000余点、石器1000余点、漆木器10余点あり、代表は十節玉琮など、青銅立人など、跪坐石人像などがある。また注目されるものに象牙が約1トン、数千本のイノシシの牙、鹿角が発掘されている。これらのものが遺址地区と、博物館展示室に展示されている。

四川大学には「四川大学博物館」がある。教育用の博物館であるので、四川省内の文化が全体に理解できるように考古文物、歴史史料、民俗関係など幅広い展示がされている。

長江を下って江西省内にはいと、江南青銅器文化のひとつの中心地であるので有名な遺跡が数多くあり、その為、遺跡地博物館もいくつかある。「新干大洋洲商代青銅博物館」は、この地区の殷代末期と考えられた大墓が、1989年に発掘されて、中原や四川の同時代の文化とことなる、江南殷文化の遺物が多く出土した。附近の大遺跡である呉城遺跡から呉城文化に属するものとされるが、墓に近いところの牛頭遺跡の文化に属するものとする説もある。青銅器では獣面紋虎耳扁足虎足鼎が特に注目される。玉器も800点近く出土し、一玉から彫られた玉羽人はすばらしい。他に銅楽器類(鐃、鐃など)、武器類がある。四川三星堆文化と比較される双面神人青銅頭像も角が大きく独特なものである。

遺跡地にある「新干大洋洲商代青銅器博物館」の展示品は、ほとんどコピーのもので、遺物は「江西省博物館」にあつめられている。

「樟樹市(旧清江県)博物館」は附近にある新石器時代から秦漢時代にいたる遺跡「筑衛城・呉城遺跡」に関する展示がされている。

江西省の長江沿岸にも注目される遺跡がある。そこには青銅器文化の基になる銅鉞山が分布している。その一つが、瑞昌市にある銅嶺銅鉞山遺跡があり、遺跡地では今、銅滓片が採集されるだけである。銅鉞山に関する遺物の展示は、「瑞昌市博物館」で見られる。

九江市は長江に面して水陸交通の重要地で、市内の甘棠湖には「煙水亭」という、宋代にはじまる亭があり、三国時代の赤壁の戦で曹操軍を大破した呉の名将周瑜が、水軍の訓練した場所とされている。ここが「九江博物

館」とされているが、博物館的ではない。

江西省の省都である南昌市には「江西省博物館」がある。江西省内の古代から現代までの文物が展示されている。前述した殷周時代のこの地区の独特の青銅器文化と、省内にある有名な製陶地の景德鎮古窯出土の陶磁器の展示も、博物館の重要な部分である。私にとっては、江西省南部の広東・福建省内の文化と関係のある文物展示は大変参考になるものであった。

長江下流域の安徽・江蘇・浙江省の三省内にも立派な博物館がいくつかある。安徽省では、馬鞍山市内にある朱然にかかわるものだけを最近見学した。1984年に、工事中偶然発見された、『三国志』で有名な呉の将軍・孫権とかかわりのある朱然の墓が馬鞍山市にある。墓はすでに盗掘にあい、こわれていたが、墓中から副葬明器などが発見されたのを中心に遺跡博物館を創設している。「三国朱然墓文物陳列館」は、塼築の前後二室(全長8.7m、幅3.5m)の斜墓道をもつもので、その墓の周辺に出土品(模品が多い)を並べる陳列ケースがある。注目されるものには「刺」といわれる今の名刺のもとになるもので、長方形の板の右端に「持節右軍師左大司馬當陽侯朱然拜 間起居 字義封」とみえる木版がある。これに類するものが他に二つある。この発見からこの墓が朱然の墓であるとされたのである。この外、三足の「脇息」「下駄」朱・黒で文様がかかれた漆器があり、当時の貴族達の宴会の様子が書かれたものもあった。他に青磁の器物も出土している。館の案内には地元の学生(英・中国語)が実習を兼ねてついてくれる。遺跡のまわりは「朱然文化公園」となって市民のいこいの場にもなっている。

江蘇省では、省都南京市にいくつかの博物館がある。蒋介石政府が南京にあった時に、蒋介石は町に街路樹を多く植えたので、今の南京は緑の町になっていて、少し市内交通の便を妨害しているようである。市街の東側入口である中山門をはいったところに「南京博物院」がある。私が参観した時(2013年夏)は博物館改築中で半分程の部屋(玉器と陶磁器と織物関係だけであった)を参観できた。

南京市内には公立のものとして、「南京市博物館」がある。市内のほぼ

中央の朝天宮にある。道観である朝天宮を利用した博物館で、南京市域から出土したり、蒐集したものがある。旧石器時代の南京人をはじめとして、民国時代までの逸品がみられる。特に六朝時代、宋代、明代などの陶磁器、漆器、阿育王塔、墓誌、仏像、金棺銀槨、服館品(玉器、金銀)、書画、冊があり、見学する価値のある博物館のひとつである。博物館の古建築も一見の価値のあるものである。

南京市周辺には、南朝の皇帝達が陵墓を造営したが、その墓前には、風水思想にもとづく、石刻の「辟邪」「石碑」「参道の柱」などが置かれている。今日、南京市周辺と大運河沿いの丹陽地区でみられる。これらは遺跡であるが、遺跡博物館として見学する価値が大いにある。

南京から長江を北に渡って、楊州市に入ると、新市街の文昌西路に「楊州博物館」がある。これは「楊州博物館」と「楊州中国彫版印刷博物館」が一体になったもので「楊州双博館」とも称す。建築は2005年で、まだ新しく館とまわりの公園とが一体化した大きな文化観光区になっている。建物の2、3階が陳列室になっている。楊州は遣唐使などが立寄る場所であったので、日本とは関係が深いところである。また、最近、隋の煬帝の墓ともいわれる隋墓が発見されて、出土文物の一部が博物館で展示されていたようである。

博物館の常設展示は「広陵湖——楊州古代城市故事」があつて、楊州全体の歴史を示す。展示品が漢代以来の文物があり、中でも元代の「霽藍釉白龍紋梅瓶」は国家一级文物中でも逸品とされるもので、館の自慢のものである。書画では「楊州八怪」と称せられた清朝にこの地で活躍した書画作家の陳列も必見のものである。

市北部の丘陵上に、金印「広陵王璽」が出土した、楊州市街の千江県甘泉二号墓の木槨室を移転してきて展示している。地下に槨室・木棺・遺物(複製品が多い)が展示されていて、考古学ファンなら一見する価値がある。

楊州市には、隋・唐代の楊州城があり、中国社会科学院考古研究所が発掘調査していて、城門部分の構造が検出されている。この城は南北水運の重要な大運河沿いにあるため、城門も陸・水の両門の構造をもっている。現在はこの城門を見学できる様に、地下構造が見学できる現場博物館よう

な構造の遺跡博物館を計画している。

楊州市から再び長江を渡って北方にいくと無錫市にはいる。ここは江蘇省南部に位置する新しい工業都市として発展し、日本企業も多く進出している。市は太湖の北岸にあり、観光地として有名で、「無錫太湖国家リゾート」になっていて、多くの観光地があり、靈山大佛・錫恵公演・常修天寧寺などが有名である。この市内に新しい「無錫博物館」がつくられている。外観は木造のようにみえる建物で博物館と文化館の二つにわかれているようである。

博物館は付近から蒐集された、陶磁器(無錫窯関係)、書画関係と模型で復元された昔の生活を示す展示がある。歴史・考古館内のものは余り期待されないが、学生・一般の教育用としては地元では重要な文化施設である。

無錫市から蘇州市に行く途中で、市内から北に少しいったところに、古代の呉文化に関係する遺跡博物館がある。それは「鴻山遺跡博物館」と「呉文化博物館」で、春秋・戦国時代の呉・越文化に関する展示で、小型のものであるが、非常に注目される新しい博物館である。「鴻山遺跡博物館」は呉の春秋・戦国時代の遺跡の、特に墓を中心としたもので、墓の構造・出土品を、遺構の上からアクリル板を通して見学できる。出土品は2000件以上ある。ここは華北と違って地上に墓をつくる土墩墓形式で、日本の古墳のつくり方と類似するところがあって注目されるものである。出土品は土器、青銅器などがあり、特に墓坑に土器(この地域に独特な印文陶)が多く副葬されている。この遺物博物館に並立される形で「呉文化博物館」という小さい博物館が並立されている。

無錫から少し北上すると、この地域での最大の古都・観光都市である蘇州市にはいる。ここはまた、大運河と蘇州河の交差点にあたり、長方形の城壁の外周には濠が廻っていることから“水の都”として名高く、イタリアのベネチアと友好都市になっている。この町にある、太平天国(1851年、洪秀全が作った政府)の王府(忠王府)のそばに、2006年に、中国系のアメリカ人建築家である、イオ・ミン・ベイ(貝律銘。日本滋賀のMIHO美術館も建築)による、新しい庭園・外形も美しい「蘇州博物館」を開館している。観光地の博物館であるため、入館者も多く、館外に相当長く列を作っ

てから入館することになる。館藏品・展覧品には、この地の呉文化を示すものが中心に原始時代から現代にいたるものがみられるし(国家一級文物＝国宝クラスが250件以外に多くの二・三級文物を含む)。特に春秋・戦国時代の呉文化関係のもの外、呉文化の陶磁器・書画・絹布生産地としても有名なもので、その関係の織物など多く見られる。この地域に来た人は町全体の観光、寒山寺、留園、虎丘公園(霊岩寺の斜塔)、城の南西角の盤門など数多く見学するところがある。

蘇州市の西北郊外の蘇州滄壁関開発区に、2011年1月に新しく「蘇州東呉博物館」が開館された。これは収集家として有名な陳鳳九氏が蒐集品を蘇州市に寄贈してできた半官半民の博物館で、すでに一部が紹介されていた陳氏の収藏品が、一堂に会いしてみることがえきる。特に銅鏡(約1000面)、越王勾踐の佩剣などをはじめ青磁器、唐三彩、石刻品などが館内・館外に陳列さていて、古代史・考古学に興味ある人は必ずいく価値がある。(未完)

キーワード：中国、博物館、美術館、考古学、遺跡・遺物